

北米：ARIA (American Risk and Insurance Association) の研究動向

東京理科大学 柳瀬 典由

1. はじめに

本報告の目的は、アメリカリスク保険学会 (American Risk and Insurance Association、以下 ARIA と表記) の研究動向を概説することを通じて、北米の保険関連の諸学会及び大学・研究機関がいかにして、厳しい講座間競争に対峙しようとしてきたかを明らかにすることにある。

2. ARIA の概要

ARIA は、1932 年に設立された American Association of University Teachers of Insurance を母体とする北米におけるリスク・保険の研究・教育に関する最大の学術団体であり、初代会長は「保険教育の父」ともいわれる Huebner 博士である。2015 年 2 月に改定された綱領によれば、その目的は、会員数の増加等に加えて、経済学分野における同学会の評価を高めることが明記されている。すなわち、研究上のディシプリンの多様性は認めつつも、ARIA の現在の基本姿勢はあくまで広義の経済学を基盤とする研究分野を志向していることが伺われる。こうした目標を達成するための主な活動としては、(1) 年次大会の開催、(2) リスク理論セミナー (Risk Theory Seminar)、(3) 2 つの機関誌—Journal of Risk and Insurance (JRI) および Risk Management and Insurance Review (RMIR)—の発行、の 3 つがある。

近年の研究動向としては、①「保険数理」および②「リスクマネジメント・保険」、という 2 つの領域で活発な研究が行われている。特に、②の分野に関しては、さらに 2 つの領域に大別することができる。第一に、「ミクロ経済学」を用いたモデル分析を核とする研究領域である (詳しくは大倉報告を参照)。第二に、金融経済学の領域としての「コーポレート・ファイナンス」の観点から、企業の保険やデリバティブなどの活用、あるいは保険企業の経営行動やコーポレートガバナンス等の論点を実証的に分析する研究領域である (詳しくは山崎報告を参照)。

3. ARIA のアイデンティティ危機

Huebner 博士以来、University of Pennsylvania の Wharton School の保険・リスクマネジメント学科は、長らく、北米における保険研究・教育の拠点であり続けた。ところが、2011 年の秋、同学科は応用経済学グループの一部として発展的に改組され、また、その中心人物であった Cummins 教授もほぼ同じタイミングで、Temple University に移籍している。この出来事は、少なからず、ARIA 会員をはじめとする北米の保険研究者に衝撃を与えるものであった。

例えば、2011 年の ARIA 年次大会において、「リスクマネジメント・保険の将来」と

題した座談会が開かれている。この座談会では、(1)この出来事から何を学ぶべきか、(2)隣接の社会科学諸分野における「ディシプリン」が継続的に発展するなかで、大学・大学院レベルのリスクマネジメント・保険教育の将来をどのように考えるべきか、(3)経営大学院（ビジネススクール）全体の発展の観点から、リスクマネジメント・保険分野に対する投資価値はどこにあるのか、といった論点が議論され、改めてこの研究分野における「ディシプリン」の重要性が提起された。

2018 年 8 月にシカゴで開催された ARIA 年次大会でも、ARIA のアイデンティティ危機をふまえた将来展望について議論が行われた。毎年、年次大会では、全員でランチを取りながら、新会長による講演が行われ、自らの任期中の学会戦略を明確に打ち出すのが慣例となっている。新会長に就任した Martin Boyer 教授（HEC Montréal）は、その会長講演の中で、学会構成員の研究力の向上とそうした成果を積極的に隣接学会等にアピールしていくことこそが、学会としてのアイデンティティの向上にとって、唯一かつ最も重要なポイントであると主張している。

4. 1980 年代以降の改革

実は、このような ARIA アイデンティティの危機は、1980 年代以降、常に、北米の保険研究者が対峙してきた構造的問題でもある。その背景には、大学・大学院における講座間競争がある。北米の大学・大学院における講座間競争は、テニュアトラック制度とリンクした客観的・厳格な業績指標主義のもと、想像を超える厳しさがある。このような競争の結果、北米では、過去数十年間で、多くの主要な大学・大学院におけるリスクマネジメント・保険講座が経済学やファイナンス講座の一部として再編されてきた。

こうしたなか、ARIA では、特に 1980 年代半ば以降、リスクマネジメント・保険という研究領域の重要性について、経済学やファイナンス等の関連領域の知見を積極的に吸収することで展開すべきという方向性が組織的に確認されてきた。例えば、1985 年の ARIA 年次大会の会長講演において、当時の会長、Witt 教授は、「過去 25 年間にわたって、私たちの研究分野は、制度記述型の研究スタイルから、より分析的で経済学に基づく研究スタイルへと進化を遂げつつある」と述べ、また、その翌年、当時ファイナンスの分野で次々と優れた業績を発表していた Smith 教授が、ARIA の機関誌である *Journal of Risk and Insurance* の招待論文として、「保険研究とファイナンス研究の収斂」というタイトルの論文を発表し、新しい形での保険研究の方向性を提示している。こうした組織的取り組みのなか、徐々にではあるが、その後の ARIA における基本的な研究スタイルが提示されることになった。

5. まとめ

本報告では、大学・大学院における講座間競争における生き残りという環境条件のもと、ARIA が取り組んできた一連の挑戦を概観することを通じて、われわれが今学べることは何であるか、この点を中心に議論を行いたい。